



子供の宗教教育

菅 支那子

就学前後の子供の世界を想像するだけでも、私共大人をして心おどる思いをさせるものがある。五、六才から七才と云えば、非常な成長と精力にあふれる時期である。身体は急速に發育し、語彙は驚くべき速度で増して行く。質問を發する能力は目覚しく、適当で正確な答を得ないと満足しない。もの事を学びとらんとする求知心はますます、家族から離れ家庭を外にするにつれて、次第に独立的になる。

今日の子供を考える時、彼らの科學的環境を忘れるわけには行かぬ。ラジオ、テレビ、飛行機、映画、その外数限りない現代的裝置や機械が日常の茶飯事になっている。医者の醫務室に行けば、科學的設備が整えられているだらう。小さな子供の生活も、殺菌されたミルクやヴァイタミンや注射なしに

は過ごせない。

又此の頃の子供の前には全く新たな世界が開かれている。読むことを学び始めている。新しく夢中にさせるような本の文字が意味を持ち始める。本と共に生きる新たな感激と喜びが現われる。彼らの地平線は凡ゆる方向に拡がりつつある。地理上の限界は最早家庭とその周囲に限られず、学校や公園や運動場に、たまには映画劇場に、近郊へのピクニックにと次第に遠くに及んで行く。

今日の小学生は、公立学校生であれ私立学校生であれ、進歩的教育の産物である。彼らの教室には堅い椅子と小さな机が並んでいるだけではない。教室はいろいろな活動を奨励する仕事場である。面白く且つ氣樂に本の読めるテーブル、彼

らを魅惑せずにはおかぬ美しく贅沢な本、劇化活動、画架と
絵具、收藏品、工作室、諸楽器のある音楽室等は今日の小学
校教室の極く一部に過ぎない。これらの教材を用いての興味
深い生活は、更に生氣溢れる遠足、映画、知人や名人訪問
等によって一層印象深いものとなる。

これらの事實は子供達に宗教を教えるのに直接の関係があ
る。小学児童は「神が雨を降らせる」とか「神が病氣を直
す」というような、凡てに共通するような言葉では最早満足
しない。科学的世界の中に原因結果を見ようとしている。そ
れら凡てのものの理由をたずね始める。一、二年生でも如何
して雷がなるか、植物は何故太陽の方に向くか、何が蛹を蝶
に変えさせるかを質問するということがある。全くこれらの
半童は飽くことを知らぬ好奇心を持っている。彼らの重要な
質問のうちには、生命の起源や死、宇宙の宏大無辺なことに
関するものもある。小学生は「最初の人間は何処から来たの
でしよう? それを知りたいのです」とか、「星はどれ程の
距離にあるのでしよう?」等とたずねるということである。
ジャネット・パーキンスは次のような詩で、子供のいやし難
い好奇心を美しく表現している。

I wonder at so many things

I wonder at so many things :

How the birds know how to use their wings,

How animals know what is good
For proper homes and proper food.

How do mother beasts and birds
Teach their children without words?
And why must children act just so
To live happily and grow?

Sometimes I wonder at my play
What makes my mother work all day,
And why do people often do
Work that no one tells them to?

What is it, in me, that makes me care
When sometimes things seem all unfair?
What makes me wish with all my might
That I could set the wrong things right?

It seems to me on every hand
Are wonders hard to understand.
Do you suppose that as I grow
The answers I shall come to know?

就学前後の子供達は、神が自然の中で如何して活動するかにつき、次第に知り始める。神の世界として自然界を理解するよう彼らを導くには、先ずその経験を考慮せねばならぬ。

美しい日没に対する畏敬、星を見ての驚異、月に対する親しみ、又嵐や暗に対しては恐怖を感じる。季節の循環に注目し、神の業を思わせるような自然の美しき音楽を聞き、うつりさせるような景色や色とりどりの花、威圧するような大木、魅惑的な湖、速かな流れ、そして巨大な大洋と、様々な自然の姿を経験する。宇宙の創造の営みを見て驚き、種まきや植樹によって幾分でも自然の成長を助け、自然現象や自然の過程について知る時、私共大人は彼らの宗教教育のため、絶好の機会が提供されていることに気づき、そのための責任と挑戦を感じる。

これらの経験を基盤として、子供達が宇宙に於ける神の計画を知り、宇宙の確実性を次第に理解出来るようになり、やがてはそれが神に対する変らざる信仰の芽ばえとなるように導きたい。多くの不安にみちた今日の世界にあって、いと小さき子供達が信頼すべき宇宙と公平で愛にみちた創造主との関係を見出すより助けるには、大人の側に真の工夫と努力が待っている。科学的発見やその解釈が多くなされている現代社会の子供達は、簡単な仕方で自然現象についての科学的な事実を学びつつある。従って神の観念も、それらの事実とよくつり合っていないければならぬ。

ある程度の原因結果を見たり、自然法と協力せぬ時、恐るべき結果が齎されることを理解するよう、導かれねばならぬ。法則には従わねばならぬこと、人間が法則に従って働かぬ時には恐るべき結果を来すが、神を責めるべきではないことを知らさねばならぬ。神は法則を通して働くが、その働きは直接目に見えるようなものではない。たとえ小さくとも神の世界は宏大無辺なこと、自然の神秘、その詳細細微に至る迄を知らざるべきである。後に延ばすことは感受性を弱めることになる。

しかし他の何ものにも増して、小さな子供は神の愛を人々の示す愛と結びつけることを学ぶ。神が人間を用いて他人への愛を示すことを教えるには、先ず未就学前後の子供の経験を考慮にいれる必要がある。ある子供は病気になる、医者が必要を感じる。又看護婦を知り、彼らの親切な世話を受けるであろう。交通巡査に保護されて、安全に道路を横切らせてもらうであろう。子供を愛する親心を毎日に経験するであろう。子供達に必要なものを求めるために、両親と買物に出かけるであろう。農夫が米や野菜をつくることを見聞きするであろう。又凡ての美しきものは神から来ると教えられているであろう。

これらの子供達の経験に照して、次のようなことを彼らが学ぶよう援助したいものである。即ち神の愛は人々を通して働くこと、神は愛する人間の生活のため、いろいろな備えを

するが、その過程を少しでも知らせること、神は自分自身の目的を此の世で遂行するため、その手伝いを人間にさせようとする、人々が示す愛にみちた世話、親切な生活と好意を神と結びつけることを助けたいものである。又周囲の人々や自分自身の中には神の愛が働いていること、彼らは親切と手助けを通して、自分の能力に従って此の世で神と協力すること、そして自分も亦神の目的遂行に参加したいと願うよう、神との親しみが感じられるよう、導きたいものである。

神は凡ての人々の幸福のために働くことによって、彼に協力するよう、私共に期待しているのである。神は此の世で愛と善意の生き方を支持するのである。此の愛を私共が示さないならば、私共は事実上、神に反していることを子供達が増増了解するよう導かねばならぬ。ただ神が如何して宇宙の中で活動するかを教えるだけでは、いと小さい子供には十分でない。しかも子供達は此のような協力の態度を単なる説教によつては理解出来ない。いと小さい子供達は経験を通じて最も多くを学ぶ、という児童心理の法則を無視してはならないのである。

子供の宗教教育に関して残された最も困難な問題は、祈り、神と語る経験である。これを意義あるものとするため、彼らの経験を考察すると、先ず家庭にあっては、両親や他の家族の人達が祈るのを見たり、食前やその他の場合に家人と共に祈りの言葉を言ったり聞いたりする。又あやまちを犯し

て、その間違いであったことがわかる。しかもその際、それらの間違いがわかってお詫びをし、赦されなければ、心の安らかさと家族の一員であるとの感を持つことが出来ない。又学校その他の集団にあっては、祈りを聞き、礼拝に加わり、学校社会の新しい境遇に出くわして戸まどいすることもあろう。そのような状況に適応するには子供達は特に助けと奨励を必要とするが、その際彼らを導き力づける神が断えずいますことを理解するよう、知らさるべきである。更に子供達を取りまく世界にあっては、自然の美しさに打たれると共に地震や洪水、暴風雨にあって恐怖を感じる。家庭や学校内で、又自然観察を通して、不安定状態の故に困惑を感じる。貧困、失業、もの乞いについて見聞する。此のような経験は彼らに神の愛と心づかいについて教える恰好の出発点である。

要するに子供達をとりまく人々自身の祈りの習慣が、彼らを影響すると云われる。私共が神への愛の中にいるならば、そしてそれが深く且つ真のものであるならば、子供達もその熱心の幾分は受けとるであらう。例えば物語りをする時に、私共自身がその物語りのユーモアや哀感を感じなければ、それを伝えることは出来ない。祈りや礼拝への天性はどの子供にもある。唯それが同じ方向、同じ程度でないだけである。殆どどの子供でも、何故神は見る事が出来ないかとたずねる。吹く風の見えざる働きの例が助けになる。そこには力が感じられる。木々がゆれ葉が動く時風の働きを見るが、風そ

のものは見ることが出来ない。

わけてもいと小さき子供達の宗教経験は、神の名を楽しい事柄と結びついたものであらせたい。就寝前のひと時を両親と共に神に祈ることもあろう。そしてその一日中に起った楽しい出来事を両親に話すでもあろう。或いは絵を見たり、静かな音楽を聞くこともあろう。一緒に本を読むこともあり得る。何れにしてもこのような時は子供の生活中、高潮に達した尊い時間であり、神に関する思想を織り込むことが出来る機会である。その際、幸せを分かちたいとの願いから、子供の口にする祈りは普通、感謝讃美の祈りであらう。食前の感謝には多くの議論があり、神の贈りもののうち、食事に対してだけ感謝するのは技巧的だと云う意見もあるが、家族一同が食事に集まった時、暫くでも神を覚えて感謝するならば、雑事にみちた一日中の尊い一瞬となろう。アメリカでよく用いる歌である食前の感謝

God is loving,

God is good,

And we thank Him

For this food.

等はいと小さい子供でも云える筈である。

祈願、即ち自分のためと他人のためにする嘆願は、もう一つの祈りの様式である。しかしそれには常に神の御心のままになさせ給えという態度が伴わねばならぬ。他人のための祈

願は高い程度の祈りであるが、正しく向けられれば、自分を越えて家族のため、社会や他民族、全世界のためにも祈ることが出来る。

尚祈りにはこの外に懺悔がある。理想に未だ到達出来なかったことを知り、それに達しようと願うが、そのためには自己の態度を悔い改めねばならぬ。このような真の意味の懺悔は何事かの出来事について語り合うことによって、子供達は一層その理解を助けられるであらう。

最後に祈りの一様式としては、最も無視されて来たものに黙想がある。子供達に精神的静思の価値を知らせ、見えざるものを幾分でも知らせよう導くことは可能である。私共大人の務めは、子供達を共同社会の一員として訓練すると共に、独りになる能力、人生を避けないでそれに直面する力を与えることである。これは小さい頃から、三才位からでもそのような訓練を始めることが出来ると云われている。子供達と云えども、暫くの間静かにして神のことを思い、此の秋の木々は何と美しいだろうと考えることが出来る。平生は騒しい子供も、黙思の力を養うことが出来るのである。独りになることを知らぬ者には、深い精神的賜物の根は下ろされないであらう。

以上甚だ粗雑ながら、大人の立場から子供の心を瞥見して、彼らを神の信仰に導く私共の責任と特権を再確認する次第である。